

教員が看護技術の演示で用いている指導言語の特徴

中村 美起, 大津 廣子, 中井 三智子, 三井 弘子, 林 暁子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

研究報告

教員が看護技術の演示で用いている指導言語の特徴

中村 美起, 大津 廣子, 中井 三智子, 三井 弘子, 林 暁子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

キーワード： 看護技術教育, 看護技術の演示 (デモンストレーション), 指導言語

要 旨

【目的】看護教員が、看護技術の演示時にどのような指導言語を用い指導をしているのかを分析し、その特徴を明らかにする。

【方法】1) 対象：調査時点で基礎看護技術科目の指導を担当し、学内演習の演示時に自らの演示に対して説明、または演示しながら説明を行う授業を実施している東海3県の看護系4大学に所属する看護教員10名。

2) 方法：看護技術演習授業終了後、演示時に用いた言葉に関して半構成的面接を実施した。質問項目は、①今、演示した中で最も重要だと考えている言葉 ②今までの経験の中で、多く用いている言葉について尋ね、得られた結果の内容分析を行った。

【結果】データ総数117コード、13サブカテゴリーと【要素行動を指す言葉】・【安全安楽と患者さんへの配慮の言葉】・【学生の思考を促す言葉】・【見せることを重視した言葉】・【表現を工夫した言葉】・【注目させる言葉】の6カテゴリーが抽出された。

【考察】教員が演示に用いる言葉は、技術の要素を指す言葉や安全安楽と患者さんへの配慮の言葉を多用し、演示の動作を具体的に表現する言葉が少ない傾向があることが分かった。よって、演示時の説明に用いる指導言語を工夫することで、看護技術をより理解し易く修得させる可能性が示唆された。

本研究は科学研究費補助金（課題26463242、代表 大津廣子）の助成を受け実施した研究の一部である。

1. はじめに

看護は実践の科学と言われており、看護を実践するには技能の修得が必須となる。看護基礎教育では、技能から技術へと進化していくための道程を教授する必要がある¹⁾と言われ、エビデンスと称される科学的根拠を基にした援助を対象者に合わせ、安全性と安楽性を担保した技術を提供することに重点が置かれている。

そこで、理論と実践を結びつけるため、段階的・具体的な学習計画をたて、講義・演習・実習という学修形態を導入している。深井²⁾は、看護の技術は建築や工芸のように「人に役立つものをつくる技術」というよりは、「健康に問題を持つ人の日常生活全般を組織的に援助する技術」であり、形容しにくい技術だと述べている。

看護行為を実践する能力は、看護基礎教育において基本的な看護技術を修得することからスタートし、基礎看護技術の動作ができるようになることが必須の条件となる。看護技術における動作は、提供する援助によって、対象者に対する立ち位置、体の向き、重心の置き方、力のモーメント、物品の向きや持ち方など、単一的なものではなく、各々の動作が統合された、再現性と応用性を持つ看護独自の技といえる。

この看護独自の技（看護技術）修得にむけて、効果的な教授方法の探求が進められている³⁾。生田⁴⁾は、身体の動きに関わる知の獲得について、ある種の「技能を知っている」とは技能に関するルールや心得の「情報を獲得している」という意味で「知っている」ことではなく、活動の中で「できる（行為に表す）」ことに他ならないと述べている。また、諏訪⁵⁾は、身体が憶え込んだ（獲得した）技やこつを指して、“身体知”とし、本来言語化を行うことが難しい“身体知”を敢えて言語化しようとする試みが、身体知獲得を促進するとしている。これらのことから、看護技術のような動きのある技や技術の修得には、動きと共にその動きを表現する言葉「指導言語」が重要な意味を持つと考えられる。

山崎ら⁶⁾はダンス授業における指導言語に関して、指導言語はその言葉の意味内容が、聞き手自身の身体に運動の感じを生じさせるものでなければならず、学習者

の体験に近い言葉で学習者自身の心に響く言葉をかけることが、身体の動きへとつながるとしている。看護技術修得に置き換えれば、教員が、学生の理解しやすい言葉やインパクトのある言葉、動きを的確に捉えた言葉を発し、指導することで、効果的な技術修得の可能性があると考えられる。

CiNiiで「指導言語」と検索すると85件が該当する。指導言語に関する研究は、スポーツ・体育教育や、能・ダンスなどの芸術分野で、それらの技能をより上達させたり、熟練するための方法として研究が盛んになされている^{7~12)}。

しかし、看護技術の教授の際に、使われる言葉「指導言語」に着目し、説明の際に具体的に使用した言葉について検討されている研究はみあたらない。「言葉」は、「人の発する音声のまとまりで、その社会に認められた意味を持っているもの。感情や思想が、音声または文字によって表現されたもの。」¹³⁾とあるように、演示で用いられる言葉は、看護技術を教授する教員間で認められる意味や、感情や思想が表現されていると思われる。技術の教授は言わば、技術の伝承であり、その際にどのような指導言語が使われているのか、その特徴を明らかにすることで看護技術教育における効果的な指導方法への示唆を得られるのではないかと考える。

そこで、本研究では看護技術の演示（＝デモンストレーション）時に、看護教員がどのような言葉（指導言語）を使って指導しているのかを把握し、その特徴を明らかにすることを目的とし研究を行った。

2. 研究目的

看護教員が、看護技術の演示時にどのような指導言語を使って説明しているのかを分析し、その特徴を明らかにすることを目的とした。

3. 用語の定義

看護技術の演示（デモンストレーション）：学内で行う基礎看護技術教育の演習授業で、教授する技術を教員

が実演して示すことをさす。

指導言語：教員が、看護技術の演示の際、技術の実演と同時にその動作について説明したり、演示の動作の何に注目するのかを伝える言葉をさす。

4. 方 法

1) 研究デザイン

質的帰納的方法。

2) 研究対象

調査時点で基礎看護技術科目の指導を担当し、学内演習の演示時に自らが演示に対して説明、または演示しながら説明を行う授業を実施している看護系大学教員 10 名を対象とした。

3) データ収集期間

平成 27 年 2 月～平成 27 年 12 月。

4) データ収集

協力の得られた 4 つの大学において、看護技術演習の授業終了後に、自記式質問紙を用いて対象者の年齢や性別等の特性に関する調査及び、インタビューガイドを用いた半構造化面接によるインタビューを各 45 分～60 分間行った。

半構造化面接では、実施した演示で用いた言葉の中で「①今、演示した中で最も重要だと考えている言葉」と、「②今までの経験の中で、多く用いている言葉」の 2 点についてインタビューを行った。面接内容は研究対象者の同意を得て IC レコーダーに録音した。

5) 分析方法

録音された①②の面接内容を合わせて逐語録を作成

し、データとした。演示説明の言葉に関する 1 つの意味内容につき 1 コードに細分化した。

コードの表現を手がかりにしながら、意味内容の同質性、異質性に従い、分離、統合し、コードの集合体を形成した。共通性で形成した集合体に、命名し、サブカテゴリー、カテゴリー化を行った。

分析の全過程において、看護技術の研究経験豊富な教員からスーパーバイズを受け、必要に応じてデータの解釈については、メンバーチェックングを実施し、妥当性の確保に努めた。

6) 倫理的配慮

対象者には、調査開始に先立ち研究の目的・方法・内容・個人特定を避けることへの配慮、研究参加および中止についての自由の保証と内容の守秘、辞退しても不利益を受けないこと、資料およびデータの廃棄方法等について、文書と口頭で説明した。さらに調査概要と、どの時点でも辞退自由であることを説明した後、同意書への署名をもって調査参加への同意とみなした。なお、本研究は愛知県立大学の研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

5. 結 果

1) 対象者の概要

対象者の性別は女性。年齢は 40 代が 6 名で、50 代が 4 名であった。教員経験年数は 5 年未満が、1 名、5～10 年が 3 名、11～15 年が 2 名、16～20 年が 4 名であった。

演示した看護技術は、生活援助技術の 8 項目で、寝衣交換が 2 名、洗髪が 1 名、排泄援助が 2 名、おむつ交換と陰部洗浄が 1 名、皮下注射が 1 名、浣腸が 1 名、体位変換が 1 名、ベッドメイキングが 1 名であった。

2) データから導き出された言葉

得られたデータ総数は 117 コードで、13 サブカテゴリと、【要素行動を指す言葉】、【安全安楽と患者さんへの配慮の言葉】、【学生の思考を促す言葉】、【見ることを重視した言葉】、【表現を工夫した言葉】、【注目させる言葉】の 6 つのカテゴリが導き出された (表 1 参照)。以下にそれぞれのカテゴリについて説明する。

※【 】はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ「 」はコードを示す。

(1) 【要素行動を指す言葉】

このカテゴリは、36 のコード数を持ち、技術の演示の際に技術の要素行動を示す言葉のまとまりから構成される。

「作業域を考えましょう」・「ベッドの高さを調整しましょう」・「作業効率を考えましょう」など、〈技術の要素を伝える言葉〉と、「汚い物汚い手で清潔なところを触らない」・「てこの原理とか、作用反作用の法則を説明する」・「ボディメカニクスは支持基底面を広くとる」などの〈技術の留意点を伝える言葉〉、「温度は〇度ですよ」・「圧迫すると問題が起こる、だからこういう形です」・「保温に注意しましょう」などの〈技術の要素を示す言葉〉の 3 つのサブカテゴリからなる。

【要素行動を指す言葉】は、教授する看護技術の要素そのものであり、演示する教員が伝授する技術のなかで、重要と判断した技術の断片を指し示す言葉から構成されている。

(2) 【安全安楽と患者さんへの配慮の言葉】

このカテゴリは、28 のコード数を持ち、技術を演示する際に安全性や安楽性に関する言葉や、患者さんへの配慮に関する言葉のまとまりから構成されるカテゴリである。

「それで安全？」・「きちんと患者さんを見なくてはいけない、目で見ると」・「安楽な方法はこうですね」などの〈安全安楽と患者さんへの配慮を促す言葉〉や、「カーテンはきっちり閉めて隙間のないように」・「言葉かけで、余計なことを言わない」・「視線を合わせましょうね」などの〈安全安楽と患者さんへ配慮する言葉〉の 2 つのサブ

カテゴリからなる。

【安全安楽と患者さんへの配慮の言葉】は、教授する技術そのものというより、援助提供に必然とされる対象者への配慮すべき事柄を示す言葉であり、演示した看護技術の相違があっても、同様の安全安楽に関する言葉のまとまりから構成されている。

(3) 【学生の思考を促す言葉】は、23 のコード数を持ち、技術の演示の際に学生に何らかの思考を促す言葉のまとまりから構成されるカテゴリである。

「それってどうですか」・「今の状態ってどうですか」・「確認のような言い方をする」など〈考えさせるための言葉〉と、「困っていることは何？」・「本人がどう捉えているか聞きます」・「難しいところはどこ？」などの〈難しい部分の確認をする言葉〉、「ここはこういう意味ですよ」・「注意することとして、なぜかっていうことを言う」・「これを行うのは、こういうためですよ」などの〈根拠を説明する言葉〉の 3 つのサブカテゴリからなる。

【学生の思考を促す言葉】は、演示する教員が、学生の理解を深めたり、机上での学びを実践へと結びつけるための思考を促すための言葉で構成されている。

(4) 【見せることを重視した言葉】は、技術の演示の際に学生に見ることや見せることを示す言葉のまとまりから構成されるカテゴリである。

「やってみせるから見てごらん」・「こんなふうにすると上手にできるようになりますよ」・「もう一回よく見ていてね」などの〈技術内容をこのように等で示す言葉〉のサブカテゴリからなる。

【見せることを重視した言葉】は、動きのある援助技術の演示について、教員が「見ること」「見せること」を意識した言葉から構成されている。

(5) 【表現を工夫した言葉】は、12 のコード数を持ち、技術の演示の説明で表現方法を工夫した言葉のまとまりから構成されるカテゴリである。

「手をガイドのように使って」・「小指をつっかえ棒にしてから刺す」・「鉛筆を持つように」などの〈比喩的表現を用いた言葉〉と、「方向は腹壁に向かって」・「背中を地面と垂直になるくらいまっすぐにおりる」・「足を前後に広げて」などの〈動作をイメージしやすい言葉〉の 2 つ

表1 演示に用いた言葉の 카테고리

| カテゴリー | サブカテゴリー | コード数 | コードの一例 | | |
|------------------|------------------|------|----------------------|----------------------------|---------------------------|
| 要素行動を指す言葉 | 技術の要素を伝える言葉 | 5 | 作業域を考えましょう | ベッドの高さを調整しましょう | 作業効率を考えましょう など |
| | 技術の要素を示す言葉 | 28 | 汚い物汚い手で清潔なところを触らない | てこの原理とか、作用反作用の法則を説明する | ボディメカニクスは支持基底面を広くとる など |
| | 技術の留意点を伝える言葉 | 3 | 温度は0度ですよ | 圧迫すると問題が起こる、だからこういう形です | 保温に注意しましょう など |
| 安全安楽と患者さんへの配慮の言葉 | 安全安楽を促す言葉 | 14 | それで安全? | きちんと患者さんを見なくてはいけない、目で見えるんだ | 安楽な方法はこうですね など |
| | 患者さんへの配慮の言葉 | 12 | カーテンはきっちり閉めて隙間のないように | 言葉かけで、余計なことを言わない | 目線を合わせましょうね など |
| 学生の思考を促す言葉 | 考えさせるための言葉 | 10 | それってどうですか | 今の状態ってどうですか | 確認のような言い方をする など |
| | 難しい部分の確認をする言葉 | 6 | 困っていることは何? | 本人がどう捉えているか聞きます | 難しいところはどこ? など |
| | 根拠を説明する言葉 | 7 | ここはこういう意味ですよ | 注意することとして、なぜかかっていうことを言う | これを行うのは、こういうためですよ など |
| 見せることを重視した言葉 | 技術内容をこのように等で示す言葉 | 11 | やってみせるから見てごらん | こんなふうになると上手にできるようになりますよ | もう一回よく見ていてね など |
| 表現を工夫した言葉 | 比喩的表現を用いた言葉 | 7 | 手をガイドもように使って | 小指をつつかえ棒にしてから刺す | 鉛筆を持つように など |
| | 動作をイメージしやすい言葉 | 5 | 方向は腹壁に向かって | 背中を地面と垂直になるくらいまっすぐにおりる | 足を前後に広げて など |
| 注目させる言葉 | 意識を集中させる言葉 | 9 | ここがポイント | ここに注目して | 重要なのでしっかり見ましょう など |

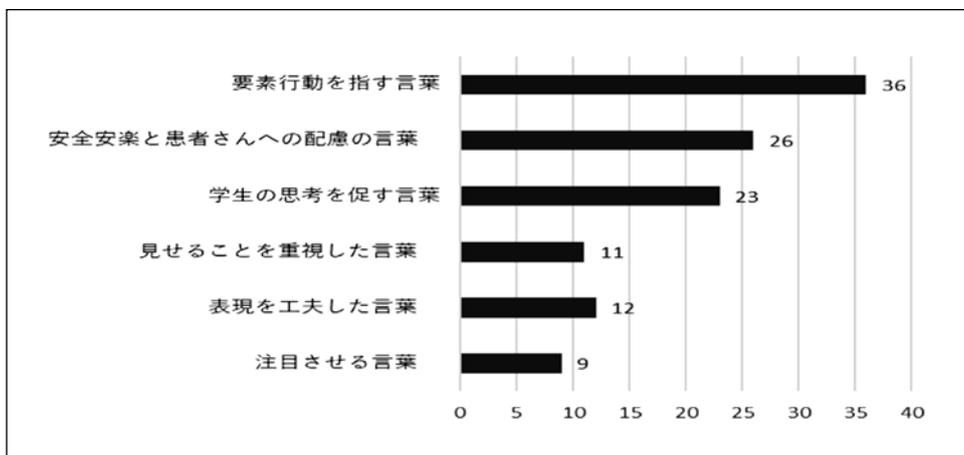


図1 カテゴリー別コード数

のサブカテゴリーからなる。

【表現を工夫した言葉】は、教員が演示している技術動作を学生がイメージし易い表現に置き換えた言葉から構成されている。

(6)【注目させる言葉】は、技術の演示の際に注意喚起する言葉のまとまりから構成されるカテゴリーである。「ここがポイント」・「ここに注目して」・「重要なのでしっかり見ましょう」などの〈意識を集中させる言葉〉からなるサブカテゴリーからなる。

【注目させる言葉】は、教員が演示している援助技術の一連の動作の中で、学生に印象づけて、修得につなげようとする言葉から構成されている。

6. 考 察

教員が看護技術の演示の際に用いる指導言語は、技術の要素を指す言葉が最も多く、表現を工夫した言葉や、演示の動作を具体的に表現しイメージできる言葉を用いて説明している指導は少ないという特徴がみられた(図1参照)。

看護技術の演示は、教授された動作を学生が練習する際に、イメージし再現できるように指導することが本来の演示である。そして学生が学修した技術を想起し、思考という内的認識を外的動作として再現できることが求められる。高島ら¹⁴⁾は、講義と学内演習のつながりをフィードフォワード機能と捉え、演習の動作の意味を検討するという授業評価を行った。その中で、学生の集中力を感じ、具体と抽象の昇り降りの大切さを確認したと述べている。このように、演示の説明で用いる言葉も、具体的表現と抽象的表現を意識しつつ、学生の反応を考慮しながら丁寧に言葉を選択することで、学生の集中力を高め、理解への一助となると考える。

さらに、塚原¹⁵⁾は、認知機能への刺激を変化させることで脳の機能を高められるとしている。そこで、演示という視覚的認知に、教員の発する指導言語という言語的認知が加えられると、記憶、連想、注意、集中の連鎖により学生の脳への刺激を変化させつつ、脳の機能が高められ、技術修得へつなげられるとも考えられる。

今回の研究で得られた結果からは、技術の要素を指す言葉が多く用いられているものの、表現を工夫した言葉が少なく、技術の理解に不可欠な具体的表現を用いた指導言語が意識されていないことが示されている。一例を挙げると、教員は「ベッドの高さを調整しましょう」と説明しているが、ベッドの高さをどのように調整するのか、「看護師の膝の位置とベッドのサイドバンパーが同じ高さになるまでベッドを上げましょう」など、「調整」という抽象的な指導言語のみではなく、その動作を想起し、指導言語どおりに動けば教員と同じ動作ができるような言語表現を用い、なぜそうするのかという根拠を加えた指導言語による教授で、より効果的な技術修得への助勢となるであろう。

また本研究結果では、安全安楽と患者への配慮を促すための指導言語が多く認められている。看護技術教育では、実際の患者に合わせて、安全かつ安楽に援助を行うことを最も重要な目的としていることから、演示の言葉として、自ずと多用されたと考えられる。教授する援助技術の違いがあっても、共通する概念である患者の安全性や安楽性は、教員間で共通な演示に用いる指導言語であると言える。しかし、この安全安楽と患者さんへの配慮の言葉も、得られたコードでは「安楽な方法はこうですね」という非常に抽象的な表現のみに終始しており、「こう」とはどのような動きや技を指しているのか、具体的な表現の指導言語となっておらず、学生はその技術を再現するときに視覚的情報の記憶に頼るしかなく、言語的情報による補填が欠如していることが分かる。ゆえに、身体知につながらない結果となってしまう。

そして、安全安楽と患者への配慮を促すための言葉と同様に多く認められたのが、学生の思考を促す言葉であった。従来の看護技術教育カリキュラムでは、1年次から4年次の間に、段階的な教授方法を取り入れ、学内で講義、学内演習、技術テストの学修過程を踏ませる。学内演習の前段階として、講義等でその技術の根拠を学び、学修した知識を想起させながら、演習での演示で実際に学ぶ方法をとることが多い。そのためこの結果は、知識を定着させ「なぜ」その援助をその方法で行うのかという根拠を、学生に想起させ、理解させることを教員が

重要視した結果と推測できる。ここでは、学生の思考を促すために敢えて、問いかけの答えとなる具体的な指導言語は用いておらず、抽象的な表現の指導言語となっている。しかし、コードとして得られた指導言語の「それってどうですか?」という発問を例に挙げると、演示の動作の流れの中で意識を集中しながら見学している学生は、教員から何を質問されたのか理解し難い。さらに、演示が終了したとき、演示の場面で何を指し示し教員が発問していたのか、何を問うているのが記憶に残り難い。やはり、「それ」が指し示すことや動作そのものを表現する言葉を使うことが求められるであろう。例えば「注射針の刺入角度（「それ」が指し示す言葉を指導言語として用い）はどう（何度）でしたか。」など、教員が何を問いかけているのかを学生が理解し易く、記憶に留まる発問をする必要があると考える。

先にも述べたが、演示の際に表現を工夫したことや注目させる言葉が少ない傾向であり、看護技術を効果的に定着させる指導をするためには、指示代名詞が示す具体的内容を示す指導言語を用い学生の意識を惹きつけつつ、動作をイメージしやすい比喩的な表現を用いるなど、学生に説明する時の指導言語を工夫する必要があると考える。

7. 研究の限界と課題

本研究結果は、研究協力の得られた4大学の教員に限定されるものであり、一般化するには限界がある。今回は半構成的面接法で質問に対する回答を得たが、演示に用いている言葉の認識や捉え方が研究対象者によって異なり、質問によって教員の言葉を捉えきれていない面が否めない。

また、本研究では、研究対象者の特定を避けるために、教員経験年数による指導言語の比較を避けた。よって今後は、教員経験年数による演示で用いる指導言語の認識や、特徴の相違の検討なども必要ではないかと考える。

さらに、今回は研究対象が教員のみであったが、今後は演示での指導言語を学生がどのように捉え理解したかを双方向的に調査し、効果的な指導言語の詳細について検討する必要があると考えている。

8. まとめ

教員は学生が理解しやすいように、教授する技術の要素を指す言葉と共に、見ることや学生の思考や集中力を促す言葉を使用し、看護技術の演示を行っていた。しかし、使用している指導言語は演じている看護技術の具体を詳細に表現しきれておらず、「ここ」や「それ」、「このように」などの指示詞や代名詞で示されることが多く、演示の際に表現を工夫した言葉や注目させる言葉が少ない傾向であることがわかった。

9. 謝辞

研究にご協力頂きました関係施設の教員の皆様に感謝申し上げます。

本研究は、科研研究費助成事業の助成を受け実施した研究（基盤研究C 課題番号 26463242：代表大津廣子）の一部であり、日本看護科学会第36回学術集会上に発表した。

引用文献・参考文献

- 1) 阿曾洋子：実践へつなぐ看護技術教育（奥宮暁子，鈴木純江，藤原千恵子，編著），医歯薬出版株式会社，東京，6，2006.
- 2) 深井喜代子：基礎看護技術I（第4版3刷），メヂカルフレンド社，東京，2，2017.
- 3) 大津廣子，佐藤美紀，滝内隆子，その他：学内実習における教員の基礎看護技術の実施状況と指導方法，愛知県立大学看護学部紀要，19，31-40，2013.
- 4) 生田久美子：知っていてもできないとはなにか，教育哲学研究，65，30-35，1992.
- 5) 諏訪正樹：身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化，人工知能学会誌，20（5），523-525，2005.
- 6) 山崎朱音，村田芳子：ダンス授業における指導言語と発言に至る思考の特徴について，スポーツ教育学研究，30（2），11-25，2011.

- 7) 北村勝朗：スポーツ・音楽・芸術領域における「わざ」習得過程の定性的分析による「教育情報」の解釈，教育情報学研究，1，77-87，2003.
- 8) 永山貴洋，北村勝朗，斉藤茂：器械体操競技選手の学習方略に対して比喩的な指導言語が与える影響の定性的分析，教育情報学研究，3，67-76，2005.
- 9) 植田恭史：コーチング研究〔II〕－水平跳躍種目の技術指導における用語と言い回しの分析－，東海大学体育学部紀要，32，13-18，2002.
- 10) 中西沙織：能の稽古における指導言語に関する研究「わざ言語」をてがかりとして，北海道大学紀要，教育科学編，64（1），111-119，2013.
- 11) 及川千絵，勝田隆，関岡康雄：ソフトボールにおける指導言語に関する研究－高校女子プレーヤーとその指導者を対象として－，仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集，4，2003.
- 12) 柴田庄一，遠山仁美，技能の習得過程と身体知の獲得－主体的関与の意義と「わざ言語」の機能－，言語文化論集，名古屋大学，24（2），77-93，2003.
- 13) 松村明編集：大辞林（第3版），三省堂，東京，931，2006.
- 14) 高島尚美，伊藤綾：基礎看護学における授業展開と評価－基礎看護方法「姿勢と動作」－，Quality Nursing，3（12），39-47，1997.
- 15) 塚原健太郎：神経系への負荷設定－アスリート向けのシナソロジー，Training Journal，April，16-19，2017.
- 16) 楠見孝：類似性と近接性－人間の認知の特徴について－，人工知能学会誌，17（1），2-7，2002.

Characteristics of the teaching language the teacher uses in the demonstration of the nursing technique

Miki NAKAMURA, Hiroko OTSU, Michiko NAKAI,
Hiroko MITSUI, Akiko HAYASHI

Faculty of Nursing,
Suzuka University of Medical Science

略 歴

中村 美起 鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科 助教

学 歴：

平成20年 国立大学法人 三重大学 人文学部 卒業

22年 国立大学法人 三重大学 医学部研究科 看護学専攻 修了

28年 国立大学法人 三重大学 医学部研究科 看護学専攻博士後期課程 在学中

職 歴：

平成22年 国立大学法人 三重大学医学部附属病院 看護師

26年 現職

主な研究内容：

看護倫理

看護教育

看護技術教育

その他の社会的活動：

家族社会心理学研究所 研究員